

# 旅衣

高橋信之句集

## 目次

ドイツを歩く／昭和六十二年～平成五年……	四
旅衣を解く／平成六年～平成十五年……	一九
跋……	信岡資生……三五
	柳田征司……三六
	高橋正子……三七
あとがき……	三八

ドイツを歩く

装幀 武田道夫

昭和六十二年

竹の葉を降らせて時がまた進む  
大杉の芯を鳴らして青あらし  
炎天を行くわが影に離れずに  
引き返す蜻蛉よ白き光りとなり

小田

霧流れ去れば稜線すぐそこに  
バスの胴濡らし山霧抜け来たる  
ビニール袋にどんぐり透かせ持ち帰る

昭和六十三年

近づいて梅の匂いの中に入る  
寒灯の輪が頭上に子と団欒  
節分の豆がひしめく子の拳  
白れんのおおらかにその上の空も  
一日が楽しく柿の明るい若葉  
げんげ田の遠くもげんげの濃き色に  
涼風の遠くを揺らしそれからくる



松野町

花大根不器男の里の地の深し  
いく匹も蝶遊ばせて樹の空間  
花アカシヤの甘き匂いの空に降る  
炎天へと屋根持ちあげている柱  
暁けてゆく空のさやけき青に会う  
コップの水一気に飲んで秋を逝かす  
樹のなかの見えない暗いところから落葉  
明るみへつぎつぎ落葉吐き出す樹

平成二年

雪山を遠くに置いて子と遊ぶ

瀬戸大橋

春の島へとゆるやかな橋の曲線  
ごぎ敷いてその上に花影を置く  
新入生の明るい声で挨拶され  
檜青葉山の匂いを庭に降らす  
植田に空生きいきその中にわれも  
噴水落ちて水叩く軽やかな音

フランクフルト

氷菓食べ歩く異国と思わずに

夏空の青く暮れゆく青き児の眼

夏空の暮れゆく青を鏡とも

ヴェルツブルク

夏に芯あればそこより鐘の鳴る

ベルリン

灰色に夏の冷たき雨降らす

ベルリンの雨を素肌を受け歩く

ノイシュバンシュタイン城

こつぜんと霧に現われ城淋し

牛あそばせ村の教会霧の中

ポプラ葉を落としつつ鋭く立てり

ローテンブルク

秋風と出会う石畳の広場に

フランクフルト・リンベルク画廊

湯籠に菊活け菊匂わせわが個展

バートホンブルク城にて日独俳句大会

ドイツ語話し日本語話しきりりと秋冷

独文学会中四国支部長を受く

師走晴れて都心の空を深くする

小鳥来る都心の小さい森の中

蕪がつけもの透きとおるような白

逝く年のしずかな刻よ白湯飲んで

平成三年

湾岸戦火青一色の寒の空

白れんの大きな白が厠（し）の窓に

田水張られ空の深さを水に見る

冷房の風がときどき家具を鳴らす

成田を発つ

楽しくて晩夏の地球の裏側へ

八月二十一日クーデター最中のモスクワ空港

夏を逝かすここでも明るい少女の顔

ウイーンの森

八月の夜の暗さでしずかな森

ミュンヘンへの機上より眼下に

八月のアルプス雪の新鮮に

くつたくなく秋を日本の一家族

白ワインの白が秋の近づく光に

コペンハーゲン

日が落ちる速度の遅い晩夏の国

ロンドンヒースロー空港

制服のポリスをつつみ秋の空気

徳島

父祖の地の川のきらきら十一月

九月三日

萩の白咲かせ句美子の誕生日

白萩の軽さを宙に活かしている

平成四年

軽いのがよい賀状一枚掌に載せる  
地球の裏側から年越して来た賀状  
雪がふる山のかたちに雪がふる

三崎半島

東風吹くにまかせ無人灯台は

金山出石寺二句

春の霧流れ山頂平らな寺苑

春暁の護摩を焚く炎のいさぎよし

大洲・西村健一先生居

二階ぐるりと大玻璃外は菜種梅雨

早稲田大学

若葉蔭少し暗くて静かなる

松山空港

降りてゆく青野のなかの滑走路

旅に出て梅雨のみどりに深く染められ

星飛ぶと子が言い今日の終わりの刻

しばらくは木犀の金踏み歩く

岡山大学

秋光あふらせ学会少し華やかに

元

ラガーの手を離れてからの自在なボール  
木が眠る冬日の注ぐぬくもりに

平成五年

水餅の水澄んでいる妻の留守

哲斉居新築成る二句

冬の日がまっ正面に南面に

春光あふらせ玄関のふきぬけに

足摺岬

燈台の白ひきたたせ春の黒潮

四万十川

春川の大きな幅で光りの流れ

龍河洞

洞穴のなかに坂あり春浅き

春の雷生きていることありありと

中国・大連外国語学院で集中講義三句

風薫るなかのふるさと大連は

尾びれ背びれ薄暑の水をしたたらす

煙突いく本も五月の風の中

北京大学二句

アカシヤのみずみずしくて花たらす

乾杯のビールあわあわ北京大学

万里の長城

城打ちて空へ吹き上ぐ風青し

葉桜を揺らし団地へ吹く川風

衣山へ引越す

西からの風吹き夏海の匂い

北条・井上ミツ居

ときには高く蜻蛉が浜の風に乗る  
夜となれば穂草しずかに匂いあぐ

インターネットを始める

ひとり起きてさわやかな灯の下に  
刃物入れられ柿の朱がまた新鮮に  
キャンパスの落葉深ぶか踏み帰る  
はつふゆの空映る池生きいき青し

十二月十五日、同僚土屋明人教授の葬

かたくなに生きて死にたり師走の灯  
師走の夜のどれもが影をしかと持つ

旅衣を解く

平成六年

鴨池の鴨帰りしを妻の言う

上尾峠

雪解けて峠に流る水の匂い

川あおお流れあざみの群生に

青谷の蝶と出合えば旅人よ

泉汲む朝の時間の楽しみに

車窓の山黄葉とその上の青空

松江

城が近くの桜もみじに明るい朝

平成七年

味酒小 PTA 句会

正月の灯の下で輪になって語る

忘れたきこと多き世やばら活ける

わが体内をさわやかに吹く風のあり

新谷の平尾から栗の送らる

すこやかな息する栗よ籠に盛らる

平成八年

鴨翔んで己が影との別れなる

三月三十一日、愛媛大学を退官し、名誉教授となる

春の空白く拡がり別れの日

来住庵寺二句

礎石と言う確かなものよ花冷えに

藪椿咲いて支配のないところ

梅雨晴れの明るさに白を着る

尾道二句

秋天の瓦の青し直哉の居

モンマルトルは秋が似合うよ芙美子の絵

枯れてゆく岸に空気のきれいな流れ

十一月二十七日、水煙のホームページ開設

冬天の青のひたすら一枚で

平成九年

一月二十六日、母千代子永眠

冬に安らぐ九十二年を強く生き

一月三十一日、肺炎と診断され、愛媛病院に入院

冬光の少し悲しき点滴を

二ヶ月の病室の灯が甘酸っぱい

重く軽く病棟に浴い雪の降る

句美子が見舞いに折ってくれる

折紙の鶴も金魚も春立つ日

菜の花が好きで見舞いの花のなかに

二月十七日、明日退院と主治医に告げられ

春浅き夕空淡きむらさきに

階下りるさくら吹きくるなかを下りる

家庭菜園

とまと苗植え手に青き匂いに移り

咲きつづくとまとの花の今朝も黄に

夜が涼しインターネットの交流に

空青く拡がる下で大根蒔く

貝割菜摘む朝日きらきら摘む

落葉して地のさんざめくなかを歩く

太陽の真ん丸い顔して冬だ

平成十年

元朝のしずけさにいて白がよし

若竹の風吹く空へいく本も

花蜜柑匂うインターネットの静かな夜

花苗買うわれに妻子のある生よ

東京吟行、上野・西洋美術館

ピカソの絵の明るい色よ梅雨に日も

海青あお記憶の夏と一つになる

りんどう咲く山の高さに天体観測館

平成十一年

白と黒すつきり分けて寒灯し

寒卵丸く握って張りがあ

湘南

春暑く近くに海があるという

三田・慶応大学

春浅き坂大学の正門へ

樹の芽吹くあたりの空気ふかぶか吸う

長男元、慶大環境情報学部入学

東京の空の静かに霞みたる

長女句美子、松山東高校入学

新しき校章胸に入学す

街に出てひじき目刺を買い帰る

校正のファックス届く窓に青葉

白桃の一箱持って少女来る

赤とんぼ群れる辺りの空気がきれい

炎天静かなりポストまで行き帰る

虫の鳴く声が地上を離れ去る

薄にもその在りよ

うの風が吹く  
せんだんの実を朝空に散りばめる

平成十二年

水仙匂ってくるパソコンのある部屋へ

ふところに梅の小枝を匂わせ帰る

沈丁の匂いを嗅げば亡き母へ

街からの音が春山打ち空へ

東京深川、水煙創刊百号記念大会二句

地酒いく本も春夜の語らいに

芭蕉庵跡

若葉蔭ここに芭蕉が棲んだとか

咲きはじむ野ばらの白よ旅衣を解く

大阪城二句

天守閣その上に夏雲を湧かせ

濠いっばいにさざ波の涼しさを

四十五番札岩屋寺

姿よき芒を活ける宿坊に

刈田の上の空までが何にもない

考えていて手は秋冷のテーブルに

十一月十日

巫浪忌の時の流れのその中に

現代俳句精鋭選集に正子の句が収録

ページめくれば冬さわやかな音を立てる

神戸異人館

師走晴れて神戸の海を遠くに見る

平成十三年

しなやかに新年へ新世紀へと

妻と娘の厨の音の四日なる

水平線寒き一本沖に引く

わが影の付き来て楽し寒き日も

宇和島水産高校えひめ丸ハワイに沈む

春寒の海底深く君ら眠らむ

藤房の野生の白を高きに垂れ

京都二句

すくすくと育つものあり青葉の京に

早起きの眼に満開の山ぼうし

新居浜船木神社・臥風先生句碑

句碑静かなり炎天の静かなれば

隅田川・水上バス

秋空を遠くに川を上る船

芦ノ湖

登り来て秋の高さにある湖

横浜山下公園・赤い靴の少女

秋の沖見つめる丸く大きな目

豆菓子砂糖を絡め秋の終わりに

駄菓子作る黄な粉まぶして黄の秋に

脇美代子さん作のセラミック

年逝くや送られ来しが干支の馬

平成十四年

一月一日のネット句会

この人もあの人も居て初句会

洋子さんの手作り餅

寒餅を搗き上げ白の優しさに

山匂い山全体が芽吹く気配

轉りの強き一声して去れる

盛岡の守屋光雅さん徒歩巡礼

友遠くより来て花らんまんに

萍や午前五時の鐘を聞く

走り梅雨妻の上京する朝に

明日は旅に出る冷奴が白い

富士山五合目にて富士登山チームを送る

山頂へ登るを送る手を振って

ホテルの窓から富士山頂を目指す俳句仲間を思い

夏暁午前四時濃く青く富士の山

頂へ登る夏灯をわが妻も

蝉が鳴く富士の裾野の拡がりに

苦小牧の越前唯人さんを迎えての句会

りんどうの紫濃きを活けて句座

樹とわれと立冬の海からの風に

枯れてゆく匂いの真っ只中にいる

「伊予の松山」と聞けば、そこへ行ったことがなくても、すぐ温泉と俳諧を連想し、子規や虚子の名を思い浮かべる人は多いであろうに、松山に十二年も暮らしながら、道後の湯は満喫しても俳句の道を素通りした私は、風流のたしなみに欠けた、不粋な人種と思われるもしかたがない。その私に俳諧のメッカ松山を忘れるなどばかり、二十年間続けて『水煙』を送りつけてくるのが高橋信之である。彼との出逢いの場は、私が駆け出しの講師として赴任した愛媛大学キャンパスであったが、年齢の接近もあり、やがて彼も私と専門を同じくして母校の教授職に就いたため、私とは師弟というよりは同僚の仲である。彼をよく知るとは言え、門外漢に彼の俳句を語る資格のあろうはずがないが、敢えて一人の読者として感想を述べさせていただく。

ひとしお感じるのは、そこかしこに映える明るくて深い青の彩りである。新緑の青葉はもちろん（校正のファックス届く窓に青葉）（すくすくと育つものあり青葉の京に）、空も（空青く広がる下で大根蒔く）、海も（海青あお記憶の夏と一つになる）青いのはいうまでもなく、野も青く（降りてゆく青野のなかの滑走路）、川もあおあおと流れ（川あおあお流れあざみの群生に）、風も音も匂いも青いし（大杉の芯を鳴らして青あらし）（城打ちて空へ吹き上ぐ風青し）（とまと苗植え手に青き匂いが移り）、瓦も青い（秋天の瓦の青し直哉の居）。作者が見、聞き、触れる対象そのものが青いというよりも、彼がそれらを青く受け入れ、青く昇華させて表出するのである。それも、気負いも見せず、技巧を凝らすこともなく、自然体のままである。その青は、鮮やかな群青から淡麗なコバルトブルーないし白藍まで綾があり、寂しい周囲の中で明るく引き立ち（眺けてゆく空のさやけき青に会う）（車窓の山黄葉とその上の青空）、厳しい環境の中で凜として冴える（冬の青のひたすら一枚で）（はつふゆの空映る池生きいき青し）。またしばしば、くすみがかかり、ほのかな暗さが加わる深いセレストブルー、パウダーブルーともなつて（夏空の青く暮れゆき青き児の眼）（湾岸戦火青一色の寒の空）（夏暁午前四時濃く青く富士の山）、作者の繊細で絶妙な感受性の幅の広さと奥行きを示している。

青には、学生時代の高橋信之の若い相貌がオーバーラップ

して、未熟な白面の青年の抱く茫洋とした希望、不安の混じる淡い前途への期待がのぞいて見えてくる。「青い花」がドイツ浪漫派の憧憬の象徴であるように、「青」は捉えようのないもの、漠然とした可能性、永遠の未完成の代名詞である。高橋信之は旅衣を解いても、どこか心の隅でなおまだ「青へのあてどなき旅」(eine Reise ins Blaue)を続けている。彼の句に青の影を見取ると、懐かしく、また安堵してその行くえを見据えている私である。

高橋氏の一読者として

柳田征司

本書の著者高橋信之氏と私は、大学・大学院の同窓で、長く愛媛大学の同僚でもあった。面識を得たのは確か大学院受験の折、六一年のことであるから、もう四十年以上の歳月が流れたことになる。しかし、氏の選考はドイツ文学、私は日本語の歴史と、研究分野が大きく違う上に、年齢も十年近く離れていることもあって、出会えば、あの満面の笑顔で近況などを尋ねてくれるといった、そういう関係であったかと思う。それが、八二年のゲーテ忌に氏の主催で開かれた朗読会に偶々参加し、氏の自作の朗読(小説「アベルの血」、詩「そのときどきに」、俳句十四句「死」「存在」)を聞き、紹介の一文(『愛媛国文と教育』14・15合併 八三・七)を書いたことが一つの縁となつて、『水煙』を愛読させていただくこととなつた。七年前奈良女子大学に移り、激務にあつた時も愛媛から毎月届くさわやかな明るい風に救われて来た。

はじめに「十年近く離れている」と書いたが、この度、本書の原稿を一読して、私は『研究者総覧』で氏の年齢を調べなくてはならなかつた。氏が私よりもかなり年上とは思っていたけれども、十年近くも離れているとは思っていなかった。専門のドイツ文学は勿論のこと俳句の世界でもそれぞれに重要な役務を果たし、日本だけでなく国際的に活躍して来られながら、氏は、文学に生きる人としていつも恬淡としていて、権威で人を圧倒するようなところが全くない。だら若々しい精神の人という印象があつたのだが、氏の年齢を確かめ、氏の六十歳代を中心とする作品をこうしてまとめて読み、その若々しい精神に改めて感動した。

作者は難解なことばは一切用いず、やさしいことばを用い、そのことばに可能性として内在する働きをさまざまに目覚めさせる。

雪山を遠くに置いて子と遊ぶ

八月二十一日クーデター最中のモスクワ空港

夏を逝かすここでも明るい少女の顔

風薫るなかのふるさと大連は

刃物入れられ柿の朱がまた新鮮に

つやつやと小豆が煮えて三日なる

ヴェルツブルク

夏に芯あればそより鐘の鳴る

「置いて」「逝かす」という意志動詞の使用、「大連は」の

「は」の用法、「入れられ」という視点、「三日なる」「夏

に芯あれば」という表現等々。夏の午後、異国の街の広場にたたずむ作者に折りしも鐘の音がふりそそぐ。西洋の鐘の音だ。鐘の音とともに街の喧躁は作者の耳から消える。作者は、その形のない感動にことばを与えようとする。「夏に芯あればそより」をさぐり得て、作者の感動は一つの姿を現す。同じく「芯」の例。「大杉の芯」は普通の語であるが、「大杉の芯を鳴らして青あらし」と詠まれて、このことばが輝きを持つ。

ことばが若々しく躍動している背後には勿論作者の生きる姿勢がある。作者は生気溢れる緑（緑の意の「青」も）が好きで、緑を詠む。

竹の葉・青あらし・若葉・下萌・芽・櫛若葉・植田・若葉蔭・青野・梅雨のみどり・風青し・葉桜・あざみ・青谷・とまと苗・貝割菜・若竹・りんどう・樹の芽・青葉・せんだんの実・山ぼうし・芽吹く・萍

作者はそれらを離れて見ているのではなく、その中とともに生き生きとして、いる。「妻」「子」「娘」が明るく自然に詠まれ、そして人の輪はひろがる。

この人もあの人も居て初句会

新入生の明るい声で挨拶され

ドイツ話話し日本語話しきりりと秋冷

「湾岸戦火」「海底深く君ら眠らむ」（宇和島水産高校えひめ丸）—— 作者は社会の悲しい出来事から目をそらすことはない。

詩心のない私が勝手なことを書き連ねてしまったが、新しい世紀でありながらはじめからつまずいて、希望を失っているように見える現代にあって、「明るくて深い現代語の俳

句」の可能性をつきつめて行く高橋氏の姿に惜しみない拍手を送りたい。

旅衣に思う

高橋正子

炎天を行くわが影に離れずに

「影」については、作者にはいくつかの佳句があり、得意とするところである。夏の日が真上から射している真昼間を歩く影は、小さく濃く、足元から離れることをしない。「離れない影」に痩せ身の作者の意志力が読み取れる。

いく匹も蝶遊ばせて樹の空間

現代詩的な句である。作者は現代詩や小説も幾編か成しているが、その傾向の作品といえる。信之俳句は、韻律において独特で、五・七・五の定型のリズムに対して、大陸的、現代音楽的要素が内在的にある。この句では、樹の空間の涼しさのなかに舞う蝶をまるで異空間のような青い世界に描いている。

ごぎ敷いてその上に花影を置く

平成二年の作だが、この年の夏には、家族でドイツを訪問することになっていった。その春に、愛媛大学のドイツ語教室の先生方と、わが家の裏手の桜の下で花見の宴を開いたときの作で、桜の下に莫蔭を敷いた。敷いたばかりの莫蔭には、満開の桜の影が映ったというのである。このときは、子どもたちも嬉しくて、到着の遅れたライネルト先生を迎えるのに息子は、自転車で家の周りをぐるぐる廻ったり、一年生であった娘も「ごちそうにさくらの花びらふってくる」の句を作り大変喜んだ。急逝された土屋明人先生が、博多の明太子と「緑川」というお酒を持ってこられたりと、思い出深い花見であった。今、その花影は、いんいんとして作者の胸にあることであろう。

自由市場

尾びれ背びれ薄暑の水をしたたらす

大連外国語大学に集中講義で出かけた際の、大連の市場での光景だが、大きな魚であろう。尾びれからも、背びれからも水が耀き滴れて市場の活気と自由さが感じ取れる。「尾びれ」、「背びれ」と区別する見方、ぴちぴちした様子を喜ぶあたりは、作者本来の活力の所為と、薄暑のふるさと、アカシヤ

の大連を訪ねて自分を取り戻した所のなせるところと思う。

花蜜柑匂うインターネットの静かな夜

ウィンドウズ95ができ、パソコンが一般に普及しはじめた。パソコンは作者がもつとも得意とするところで、夜も昼もパソコンに打ち込んで、画期的なCD-ROM「ひねもす俳句工房」や、「インターネット俳句センター」という水煙の膨大なホームページを作成をしたころの作。インターネットは、ただパソコンのディスクが廻るしずかな音のなかで行われる。蜜柑の花が匂うころには、夜も窓をあけての仕事となつて、しずかな夜のインターネットの仕事にも、精神の清々しさが感じられる。

水笛の竹と水との涼しい音

水笛は、おそらく小学生の息子が吹いていたものであろうと思うが、竹に水を入れて吹くときれいな澄んだ音がでる。その音色は、水の音とも、竹の音とも思えるものである。ささやかな楽しみが生活にあった。

ふところに梅の小枝を匂わせ帰る

近くに散歩に出かけ、梅の小枝を折り取ってポケットにも入れて、手は空にしていたのだろう。ふところの梅の匂いが清々しく飄逸なところがある。

赤とんぼ群れる辺りの空気がきれい

口語表現が新鮮な句で、秋の空気を「群れる辺り」という見定めた具体であらわし、空気の透明感を表出した。「きれい」という平明な語で赤とんぼが読者に近づき、羽の透明感を読者によく感じさせてくれている。

刈田の上の空までが何も無い

刈田の上の空のひろびろとした様子を言ったもので、何も無いあつけらかんとした自由さが詠まれている。「美」としての「空（くう）」が、感じ取られている。

あとがき

「水煙」を創刊したのは、昭和五十八年のことで、この九月に創刊二十周年を迎えるが、その記念に、句集「旅衣」を刊行することにした。俳句雑誌「水煙」を細く長く続けて、創刊以来、ひと月の欠号もないということ誇りに思い、その記念の刊行である。

本句集は、昭和六十二年四月から平成十五年三月までの二百二十三句を収録し、その多くは、身辺を詠んだもので、私の十六年間の生活の記録となったが、

これは、私の生の証である。

「水煙」の二十年間は、「明るくて深い現代語」の俳句を求めてきたが、この頃しきりに思うのは、芭蕉の「虚実」であり、亜浪の「まこと」と臥風の「色即是空」とも重ね合わせる。芭蕉は、「虚に居て実をおこなふ」と言い、「実に居て虚にあそぶ事はかたし」とも語った。芭蕉の有名な言葉「高くこころをさとりて俗に帰るべし」も同じ心境なのであろう。

長年、海外の俳句詩人と付き合い、インターナショナルで、グローバルな俳句と関わってきたが、今は、インターネットの俳句に関心があつて、ネット上での俳句交流に深く関わっている。芭蕉の「深い」俳句がインターネットの「明るい」世界でどのような進展をみるのか、楽しみなのである。日本の「深い」心が現代のインターネットに生かされ、グローバルな世界に受け入れられることを願っている。ネット上での新しい俳句を、私は、仮に「ネット新俳句」と名付けた。「明るくて深い現代語」の俳句である。

句集の跋は、大学時代の恩師で、ドイツ文学者の信岡資生先生と学生時代からの友人で、国語学者の柳田征司氏にお願いした。私の文学を長年ご指導くださった先生方で、ここに厚く御礼を申し上げます。また、妻正子の跋をもらったが、俳句の理解の助けになれば、と願っている。

句集「旅衣」の出版には、多くの方々のご協力、ご支援をいただき、印刷では、「水煙」発行で日頃お世話になっている身近の青葉図書にお願いし、専務村上和興氏のご好意を得た。こうした皆さんに心から感謝している次第である。

平成十五年三月三十一日

高橋信之（たかはしのぶゆき）

昭和6年5月28日大阪に生まれる。昭和39年

、故川本臥風先生に俳句を見てもらい、愛媛大学

俳句会顧問として学生を指導する。臥風先生没後

は、昭和58年に俳句雑誌「水煙」を創刊、平成

8年には、「インターネット俳句センター」を開

設し、ネット新俳句を提唱する。平成15年4月

には、「NPO 水煙ネット」を設立する。

NPO 水煙ネット理事長、愛媛大学名誉教授。

著書―句集水煙（昭和53年）、句集硝子体（昭

和63年）、比較俳句論序説（昭和55年）その他

## 旅衣（りょい）

水煙俳句叢書 第1巻

平成15年4月20日発行

著者 高橋信之

〒797-8025 松山市衣山5丁目1-50-205

電話 089-925-6023

発行所 水煙ネット

〒797-8025 松山市衣山5丁目1-50-205

電話 089-925-6023